



山田和樹&東京芸術劇場 交響都市計画

水野修孝／『交響的変容』

MIZUNO Shuko: Symphonic Metamorphoses

## あの日の音楽が蘇るとき――

### 《交響的変容》との再会 歴史的大作の蘇演に寄せて

私は現在 84 歳と 8 か月<sup>\*1</sup>。山田和樹が 2026 年 4 月より東京芸術劇場の芸術監督に就任するのに伴い、水野修孝の超大作《交響的変容》の演奏に取り組むと聞き、遠い昔の思い出のなかの音楽のような懐かしさと、また突然に頭を殴られたような衝撃を感じました。

私が東京藝術大学音楽学部楽理科に入学した 1960 年、水野は千葉大学の法律政治学科を卒業後に入学した藝大で音楽理論を学びつつ、柴田南雄その他に作曲を師事していました。でも、ひとり部屋での作曲と、千葉大のオーケストラの指揮（得意なレパートリーはグスタフ・マーラー）で多忙を極め、あまり大学には出てこなかったように思います。それでも楽理科の同級生の、既に亡くなった小杉武久らと「グループ・音楽」を結成し、演奏活動を行っていました。水野より 2 年下級生の私は、ときどき彼から指揮活動や作曲活動についての話を聞きました。

構想から作曲まで 26 年、さらに全曲初演まで 5 年かかった《交響的変容》は、ちば文化祭関連事業として、幕張クラシック・スペシャル'92 で、指揮：岩城宏之、合唱指揮：栗山文昭、合唱：東京混声合唱団、栗友会合唱団、演出：佐藤信らにより全曲初演されました。当時のパンフレ

ットを見ると、千葉県知事や教育長と並んで、私自身も実行委員のひとりに名前を並べていることに驚きました。

水野はこの大作にかける思いを、そのときのプログラムに次のような言葉で書いています。

私が音楽を志した 35 年前から私の心を満たし渦巻いていた大合唱とオーケストラの響きを現実のものとするためには、やはり言葉が必要だった。そしてそれは何かグローバルな大きな観念と理念をもったものである事が必要だと感じられた。響きが言葉を引き寄せたのである。前半は「人類にとって“今”必要な言葉」をそして後半は「人類が昔から大切に唱えてきた言葉」をすえて構成することにした。

必要な日本語は私が作詞をした。中間部で動き出し客席を包囲したコーラスは 6 つに分かれてしだいにインド、ネパール、ベトナム等東南アジアの歌をうたい、日本の追分に収斂してステージに戻る。法華経、ゲートの「ファウスト」、ベートーベンの第九のシラーの詩、ミサの言葉等が立体的に響き合いソプラノ（グレートヘン）の誘導で合唱隊は雲にのって無数の鐘の響きわたる広大な空間を昇天

しながら全曲を終わる。

この作曲家の言葉はまさに《交響的変容》の本質を語っていると言えるでしょう。

5 月の演奏会に出演する方たちとの思い出も書いておきます。東京芸術劇場の新しい芸術監督にして東京混声合唱団の音楽監督兼理事長の山田和樹さんは、ベルリン・フィルを指揮して話題を集めました。私は彼とは古くからの知己ではありませんが、朝日新聞の吉田純子編集委員とも一緒に Zoom で長い会話を楽しんだこともあります。山田さんがヨーロッパでマーラーを演奏したときのことだと思いますが、マーラーの孫のマリーナさんが会場にやってきて「私は日本に行ったことがある」と語ってびっくりしたそうです。マリーナさんが来日した目的は、私が音楽監督を務めていた岡山県の津山国際総合音楽祭に参加するためでした。彼女がアンリ・ルイ・ド・ラ・グランジュとドナルド・ミッチェルらの錚々たるマーラー学者に連れられて、ばかりでかいトランク 2 つを引きながら現われたことを山田さんの話を聞いて懐かしく思い出したものです。栗友会合唱団の音楽監督である栗山文昭さんは、私が大昔に合唱音楽に興味を持っていた時代に



©eye ohashi

ご指導を受けた先生です。読売日本交響楽団は 1962 年に創立されましたが、駆け出しのライターであった私は、当初から読響の定期公演のプログラムに連載を持っていました。和太鼓の林英哲さんについては、ベルリン・フィルの本拠地での勇壮な演奏が忘れられません。

私のような年齢になって、過去の日本の現代音楽のシーンを振り返ってみると、急速なテンポで変化しているような気もするし、またゆるやかに流れる大河のように見えるときもあります。おそらく歴史とはその二つの側面を持っているのでしょう。東京芸術劇場は 1990 年にオープンしましたが、あの天井まで昇っていくようなエスカレーターには驚きました。<sup>\*2</sup> 山田和樹芸術監督のもと、この劇場のさらなる発展を祈念します。

文：船山隆（東京藝術大学名誉教授）

\*1 2026 年 1 月現在。

\*2 2012 年のリニューアル時に 2 段階乗り継ぎ式のエスカレーターに変更された。



©Zuzanna Special

出典：水野修孝公式サイト（2 点とも）



1992 年初演時の様子



水野修孝

5月10日⑧ 12:00開演 コンサートホール

指揮・プロデュース：山田和樹〔東京芸術劇場 次期芸術監督（音楽部門）〕  
管弦楽：読売日本交響楽団  
合唱：東京混声合唱団、栗友会合唱団  
（合唱指揮：栗山文昭、碓山隆一郎）  
太鼓：林英哲  
ティンパニ：武藤厚志（読売日本交響楽団）  
総合監修：水戸博之

